明治大学の教育

情報コミュニケーション研究科の理念と教育

創立11年目を迎え

2019年、明治大学大学院情報コミュニケーション研究科（以下、情コミ研究科）は、創立から11年目を迎えます。この節目を記念して、2019年12月7日に、シンポジウム「現代社会と向き合う　国際化と多様性」を開催します。

このタイトルにあるように、情報コミュニケーション研究科は、つねに現代社会と向き合ってきました。そして、高度情報社会で発生する諸問題と、そこで生きるわたしたちの営みを「情報コミュニケーション」の観点から、学際性・多様性・国際性をキーワードとして、複数の専門領域をつなぎ横断的にとらえることを理念にしています。

記念シンポジウムポスター

【情報コミュニケーション研究科の研究】

◆学際性

複雑な現代社会と向き合うためには、さまざまな学問分野の知を協力させる必要があります。情コミ研究科に設置してある、複数の教員による学際的共同研究プロジェクトは、その研究実践の一つです。もちろん、院生は自由に参加できます。記念シンポジウムは、以下三つの研究プロジェクトの成果に基づき企画されました。

波照間永子（准教授）・須田努（教授）「アジア太平洋・パフォーミングアーツ・比較研究」

石川幹人（教授）・宮本真也（教授）「科学・社会・コミュニケーション」

根橋玲子（教授）・施利平（教授）「家族・仕事・トランスナショナル・コミュニケーション・「移民政策」」

◆多様性

情コミ研究科所属の教員は、異文化理解・多文化共生・LGBTといったことを意識した研究成果を出し、社会にも積極的に発進／提言しています。また、これらの問題に切り込む研究テーマを設定した院生も多くいます。さらに、情コミ研究科は〝世界全体がジェンダー・イクォリティ社会になるよう、その実現を目指す〟、情報コミュニケーション学部ジェンダーセンターとの協働による成果も出しています。2019年9月20日には、ジェンダーセンター設立10周年記念シンポジウムに共催者として参加しました。もちろん、院生もジェンダーセンターとの協働に参加することが可能です。

◆国際性

2014年、韓国・成均館大学校大学院芸術学研究科との交流協定を締結しました。これを契機に、波照間永子准教授（琉球・沖縄舞踏専門）がリーダーとなって「アジア太平洋・パフォーミングアーツ・比較研究」というプロジェクトが立ち上がりました。そして、毎年、情コミ研究科と成均館大学校大学院芸術学研究科の双方の院生が参加する国際シンポジウムを開催しています。記念シンポジウムでは、5年間におよぶ研究交流の成果を「伝統と創造」というキーワードで発表する予定です。

成均館大学との研究交流 韓国民族舞踊

また、情コミ研究科は、ドイツ・ゲーテ大学フランクフルト・アム・マイン言語学・文化学・芸術学部大学院との交流協定も締結しています。2015年には、ゲーテ大学のミヒャエル・キンスキー教授（日本近世史研究）をお招きし「江戸

Education of Meiji University

PROFILE

須田 努 Tsutomu Suda

情報コミュニケーション学部教授　大学院情報コミュニケーション研究科長

専門分野：歴史学 日本近世・近代の社会文化史、社会変容と民衆暴力

1959年　群馬県生まれ
1981年　明治大学文学部卒業
1997年　早稲田大学大学院文学研究科博士後期課程修了 博士（文学）
2008年　明治大学情報コミュニケーション学部准教授
2011年　同教授

主な著書・論文

『「悪党」の一九世紀』（青木書店・2002年）、『イコンの崩壊まで』（青木書店・2008年）、『幕末の世直し』（吉川弘文館・2010年）、『吉田松陰の時代』（岩波書店・2017年）、『三遊亭円朝と民衆世界』（有志舎・2017年）

所属学会

アジア民衆史研究会、東京歴史科学研究会、歴史科学協議会、歴史学研究会

時代における礼儀作法とふるまい」と題する特別講義を実施しました。情コミ研究科からゲーテ大学言語学・文化学・芸術学部大学院へ留学する院生も出ています。

【情報コミュニケーション研究科の教育】

◆教育成果

大学院への進学は「何者かになりたい」という強い意志が働いた結果といえます。「何者」とは研究者に限定する必要はありません。ようするに「現状を超えたい」という意識です。情コミ研究科はそのような院生の目的に応えてきました。わたしたち教員の課題はシンプルです。それは「院生によりよい研究をさせる」ということです。

その結果、4人の博士号取得者を送り出すことができました（2019年8月段階）。さらに、博士後期課程修了生の2人がアカデミックポストに就いています。また、博士前期課程修了生は、教職員・公務員、民間企業とさまざまな分野で活躍しています。

◆三つのカテゴリー

情コミ研究科には、「情報・社会系」「メディア・文化系」「人間・コミュニケーション系」という3つのカテゴリーがあります。ただし、これはあくまでも形式的な分類に過ぎません。教員も院生も、カテゴリーをこえて自由かつ学際的に研究に向き合えるようにカリキュラムを設定しています。院生は、カテゴリーよりも指導教員の専門領域を意識して所属ゼミを決定しますが、他の教員の指導も受けることが可能です。

◆「修士論文中間発表会」

博士前期課程の院生は、学際性・多様性・国際性を意識した修士論文の執筆に取り組みます。1年次では、先行研究の理解、専門書の読解、資料・データの収集解析といった研究の基礎能力獲得のための指導を徹底的に行い、2年次では質の高い修士論文を完成させるため、初夏に「修士論文中間発表会」を実施し、そこでの発表を修士論文提出の必須要件としています。この発表会は情コミ研究科の一大イベントであり、情コミ研究科の指導教員全員に加え、博士後期課程や卒業生も参加し、専門領域の枠をこえて活発な議論が行われます。

2019年度 中間発表会

◆「博士論文事前報告会」「研究科フォーラム」

博士後期課程に進学する院生の目的は研究者になることです。そのためには、当然、質の高い独創的な博士論文を完成させる必要があります。当然のことです。博士論文執筆予定者は、主査・副査の教員はもちろん、外部から招聘した研究者や、情コミ研究科博士後期担当教員全員を集めた「博士論文事前報告会」において博士論文の概要を発表する必要があります。そこでは、学際性・多様性・国際性を意識し専門領域をこえ、踏み込んだ討論が行われています。

また、院生には、指導教員とのゼミに閉じこもるのではなく、「学際研究」という専門領域をこえた研究報告・議論の場を保証しています。さらに、最先端の世界レベルでの研究成果に触れる機会として「研究科フォーラム」を毎年企画しています。以下はその一部です。

★ミヒャエル・キンスキー氏（ゲーテ大学フランクフルト・アム・マイン日本学部教授）「思想家としての海保青陵―ネットワーク分析からの接近」

★エレナ・エスポジト氏（モデナ・レッジョ・エミリア大学准教授）「社会学と〈メディア〉―情報社会時代における社会システム論の可能性―」

「研究科フォーラム」エレナ・エスポジト氏講演

こうした知が結実した博士論文は、「ゲーム状況における協力行動に関する研究」、「『阿波おどり』における踊りの変容」といったタイトルにみるように、現代社会の抱える複雑な現象を理解するだけでなく、日本の伝統文化がいかに変容し、現代においてどのような意味を持っているのか、といった問題にも切り込んでいます。

博士論文とは、研究者のスタートとしての意味を持つものといえます。それは、体系的な学問であると同時に独創的である必要があります。情コミ研究科の強みは、指導教員を中心としつつも、さまざまな専門分野の研究者（教員）が、博士後期課程の院生に助言を与えることを可能としていることにあります。

おわりに

現在、〝人〟としてできることとは何か、ということが問われています。そして、わたしたちに求められることは、知性に基づいた誠実な生き方と社会貢献であるといえます。それは、あまりにも抽象的ですが、だからこそよいのです。抽象的なことを思索することこそが〝人〟の能力なのです。情コミ研究科の新たな10年は、学際性・多様性・国際性をキーワードとして、この課題に向き合っていくことになるはずです。